

昭和女子大学教職課程研究報

# EduMate

vol. 5

【特別企画】

## コロナ禍と学校教育

—8人の論客が語る—

学生たちが語る!

オンライン授業 / リモート学習  
を経験してみた

一緒に考えてみませんか?

新型コロナ DE 授業づくり!



## P2 コロナ禍と学校教育

## P3 【特別企画】 8人の論客が語る

耳を澄まし、手を働かせて

男女別の分散登校をめぐる

コロナ禍で学校再開に向けて揺れるブラジル

3人称の well-being を目指して

コロナ禍で真価が問われたカリキュラム政策

オンライン学習による学習権の保障

「生徒の成長と共に」 ～コロナ危機でのチャンスを考える～

オンライン授業をめぐる冒険

## P19 学生たちが語る！

オンライン授業／リモート学習を経験してみた

## P21 一緒に考えてみませんか？

新型コロナDE授業づくり！

昭和女子大学教職課程研究報

# EduMate

## vol. 5



EdTech

Web会議システム

ICT

LMS (Learning Management System)

リモート学習

GIGA スクール

Society5.0

オンライン授業

デジタル教科書

## コロナ禍と学校教育

人類史に名を残すことが確実な「新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) パンデミック」。依然として、私たちはその最中を生きています。学校教育もまた様々な影響を強く受け続けています。「早く元の生活に戻ってほしい」という声があちこちから聞こえてきます。そう思うのは当然のことです。とはいえ、この人類共通の経験を「悲劇」で終わらせてはいけません。一人ひとりが今回の経験をいかに意味づけ、そこから何を学び取り、未来につなげていくのか。そこが問われているのだと思います。人間は学ぶことができるのです。

コロナ禍を契機にして、教育改革は新たな展開を見せています。しかし、その中身を見るとどうも違和感を覚えるものがたくさん含まれています。「新しさ」に注目が集まり、にわかにテクノロジーへの期待が高まっています。確かにテクノロジーの進化は、私たちに新たな可能性をもたらしてくれています。しかし、まずもって問うべきは、そもそも「学校教育の成功をどう定義づけるか」ではないでしょうか？そこがはっきりしていません。

「コロナ禍の最中だからこそ、改めて立ち止まって考えたい。それが今号の趣旨です。光は暗闇の中で輝きます。これまで薄っすらとしか見えなかった光は、今その強さを増しているはずです。「希望」の光をどこに見出せばいいのか、8名の論客が自由に語ります。言葉が躍る教育改革に別れを告げ、ありたい未来に向けて共に歩みだしましょう。

探究

アクティブ・ラーニング

学校評価

コミュニティ・スクール

PDCA サイクル

カリキュラム・マネジメント

働き方改革

個別最適化

社会に開かれた教育課程

アカウントビリティ



# 耳を澄まし、手を働かせて

## 1 「カタカナ言葉」には踊らない

「ウイズ・コロナ」、「ポスト・コロナ」は、最早聞きなれた言葉になりました。2020年の流行語大賞は「3蜜」でしたし、「コロナ禍に翻弄された年は明けても、まだ光は輝いて見えません。が、言葉は知っていてもその中身を本当に分かっている人は多いのでしょうか。この世界的な「時」に立ち会った者として、「コロナパンデミックをプラスへと転化させるための努力を怠ったのでは、後世の人々に顔向けができないと、私は思います。」

何らかの新しい発想や方針などを速やかに普及させようとする時、政治家や役所、マスコミは常套手段として、漢字を避けカタカナ言葉を使っています。教育の分野での「アクティブラーニング」や「カリキュラム・マネジメント」は周知のことです。

う。これらは、「活動的学習」や教育課程経営」に比べ、その新規性から注目は集めますが、往々にして、その本質を洞察せず、耳当たりの良さに表面的にだけ煽られてポピュリズムに陥り、「走ってしまっただけから考え、後悔することになります。アクティブラーニングに照明が当てられた時も、「何らかの活動をさせればいい」、「すわじぐソー法だ」と方法・技術を目的化する浅薄な反応に、文科省も慌てて「主体的・対話的で深い学び」と言い直したのは、ついこの間のことでした。

人間の営みに唯一絶対や完璧はあり得ないと、私は確信しています。そのため、カタカナであれ何であれ、「あれか、これか」の選択を迫る二分法は、基本的に誤りですし危険です。だからと言って、二つを同時にや、単純に足して2で割ることもあり得

ません。「国民の生命と経済の両立」は愚行で、結局はGOTO経済に頑ななため事態を深刻化させる無定見な政府を反面教師に学び、軸足（力点）を思慮深く、明確に定めなければなりません。では、ポスト・コロナはどう描いたらいいのでしょうか。

## 2 「ポスト・コロナ」の社会と教育

断言すれば、「リカバリー」（回復）ではなく「ルネッサンス」を目指すことだと思えます。

具体的に次の数値を眺めてください。内閣府の発表によれば、2020年4～6月期のGDPは前期比年率でマイナス27.8%となり、「リーマンショック後を上回る急激な落ち込み」と報じられました。「コロナ禍で緊急事態宣言が発令されていた時期です。これに対して、7～9月期のGDPはプラス21.4%で、今度は一転して「52年ぶりの高水

準」となりました。経済を回すことが促されて回復はしたものの、単純な算数でもまだ元には戻っていないことになりました。もっと回復を考えると、それは可能でしょうか、その結果生じることは、誰にも推測できません。新自由主義に固執する経済学者でもなければ、肯定はしないではありませんか。（この問題に深入りする能力も紙幅もありませんので、ダニエル・コーエン著・林昌宏訳『経済成長という呪い』（東洋経済新報社、2017年）の一読をお勧めして次に進みます。）

私は、今も都内の私立大学で、非常勤として教職科目を担当しています。この1年はZoomを活用しつつのオンライン授業に終始しました。情報環境に伴う支障を初め、様々な問題もあり、この方法が望ましいとは全く思いません。しかし、「全



てが悪」とも言えません。この1年、これまで当たり前とされていた学校教育を改めて問い詰める機会と時間を与えられましたし、対面授業を見る新たな視点にも気づけました。

1980年代以降、近代（現代も含む）主義に行き詰まり、そこから逃れ、脱却する動きとしての「フリオタール等の「ポストモダン」の主張も下敷きに、「望まれる学校教育」を考えました。辿り着いたのはソクラテス3師弟の思想と実践です。

小・中・高が一斉休業となったことを受けて明らかにされたのは、「登校させなければお手上げ」となってしまう学校教育の貧困・オンライン導入を急かせ、夏休みを短縮してでもやりたかった「知識主義・成果主義」に偏った形式的で面子重視の教育行政・一部部活の勝利主義への加担ではありませんか。ポスト・コロナで、そこに戻せば満足ですか。急ぎ二つの指摘をしましょう。

### 3 耳を澄ませて「聞く」こと

私が実施してきたオンライン授業では、情報量への配慮などから、画像は常にミュートで、適宜音声オンとしてきました。学生の顔は全く見えず、名前を表示するだけで専ら教

師や仲間の声に耳を傾け、時に共有画面（私は静止画と文字）を見るだけです。教室であれば、お互いに顔を合わせられますし、手を挙げて質問することも容易です。こちらの方が優れていると考えます。しかし、授業レポートを読むなどからすると、今の方がしつかりと聴き取っていると窥えます。透明性や可視化重視から、「見せること」に重きが置かれる現代、「聞くこと」（教師には話すこと）が疎かになっています。

極度に「空気を読む」学生にとって周囲の眼は気になります。みんなと同じペースでと合わせようとしません。オンラインはそれらから解放してくれました。特別支援教育の現場からの「不登校生や社会性に欠けコミュニケーションが苦手で、教室では発言できなかつた子が、オンライン学習で理解が深まり学習意欲も高まった。」との声とも重なります。だからオンラインではなく、この気づきを研究し、どう活かすかです。

### 4 手で「書く」ことの重視

教師志望の学生に、新聞朝刊の「コラム」（天声人語など）を読み、要約することから始め小論文作成へと結びつける指導をしています。「今

時なせ」「原稿用紙のマス目が小さい」との不満に抗している結果、書く力はもち論、考える力が培われていきます。コラム筆者の該博さに刺激されて「無知」を知り、教養の幅を少しずつ広げていきます。何よりも、思考の軌跡を辿ることができて、学生の「人」をトータルに把握できます。

そんな時、「Newsweek」日本版（2020年11月5日）でノルウェー科学技術大学研究チームの論文に出会いました。「若者も子どもも、

キーボードでタイプングしている時よりも、手書きしている方が、脳活動が活発だった。」とする報告です。これも更に検証したいテーマです。

### 5 「光」を求める今

昭和女子大学8号館（大学図書館）の正面に、「神は言われた。『光あれ。』こうして、光があった。」（『旧約聖書』創世記第1章3節）の一部が刻まれています。改めて、教育に光を求めていきませんか。



FIAT LUX（光あれ）



# 男女別の分散登校をめぐる

## 1 はじめに

新型コロナウイルス感染拡大に伴って、2020年3月から学校の一斉休校が始まりました。この休校は、4月7日に出された政府の「緊急事態宣言」が5月25日に解除されるまでの約3ヶ月間続きました。

5月の末からの学校の再開に際して、文部科学省は、それまでの通知などをまとめた「新型コロナウイルス感染症に対応した持続的な学校運営のためのガイドライン」(6月5日)を出しました。ここでは、「持続的に児童生徒等の教育を受ける権利を保障」するために、感染リスクを減らしながら学校教育活動を進めていくことが示されています。

その中の改めて提示された一つの方法が「分散登校」でした。ガイドラインでは、「学年」「学級」単位

で登校する順番を変えることに加え、「学級を複数のグループ」に分けることが例示されていました。

## 2 男女別分散登校

ところでこの「グループ」を作る際に、学年別・学級別・出席番号別などに加えて、男女別にした学校がありました。例えば以下のような例があります。

《今日から、学年別の時差登校＋男女別分散登校となりました。男子と女子が入れ替わりの登校です。登校後、教室に入る前の手洗い、そして、教室には男子だけ、女子だけの時間です。帰り際、「男子がいなくてけんかもできないからつまんない」といった、かわいらしい声も聞きました。でも、今は我慢ですね。(愛知県岡崎市立中学校HP 4月24日)》

《5月25日(月)から、男女別の分散登校が始まりました。登校前の検温と健康確認カードへの記入をお願いします。先週は、担任との個人面談という形での登校でしたが、今週は初めて新しいクラスのメンバーとの顔合わせとなりました。各学級では、担任のあいさつや各生徒の紹介、委員会・係決めなどを行いました。久しぶりに校舎に生徒のみなさんの明るい声が響きました。(福井県鯖江市立中学校HP 5月25日)》

ここでは男女別登校という事実の報告が行われていても、特に意識的に行っているという感じは受けません。おそらく学校としても分散登校の一つの形として、あまり議論もなく男女別にしたのではないかと想像できます。

## 3 男女別登校は「人権侵害」か？

ところが、これに対して問題を提起した人がいたのです。この件を最初に報じたのは、ハフポスト日本版の6月16日付の記事でした(HuffPostは2005年に立ち上げられたオンラインメディアで、リベラルな論調で知られています。日本版は2013年から、朝日新聞社との合弁会社として設立されました)。

この時期の見出しは「男女別登校は「人権侵害」と専門家が指摘。1人の母の疑問に賛同の声」です([https://www.huffingtonpost.jp/entry/story\\_jp\\_5ee818d4c5b6ddc7bdca8fb](https://www.huffingtonpost.jp/entry/story_jp_5ee818d4c5b6ddc7bdca8fb))。以下は記事の抜粋です。

《幼稚園や小中学校、高校などで三密を避けるために行われた分散登校・登校について、日時を性別によって分ける学校が出ており、保護者や専門家から批判の声が上がっている。

人権的な配慮を欠く上、ステレオタイプを押し付けることにつながりかねないという指摘だ。

「これが大人だったら？ 例えば近所のスーパーで、これから1カ月は性別で入れる曜日を分けますって言われたら、誰でもおかしいと思いますよね」

埼玉県に住む西出博美さんは、そう問題提起する。6月3日、「#ほんとはイヤだな男女別登園 声を集めています！」と題した文章をnoteで公開した。「この違和感は私だけのものじゃない」

「身体は男の子だけど、七五三でドレスを着た友人の子ともいいます。そういう子たちはどう感じているのかと思うと『こんな社会でめんどね』と思いました」

「性別が違っただけで、友だちに会えない。新入園の子は性別の違う友だちを作ることさえできない。子どもの権利を蔑ろにしまっていると感じます」

「分散登園は一時的なものなのだからいいじゃないか、という声もありました。でも、日常的に『男女』を意識した教育が行われているからこそ、緊急時の対応として、男女別の登園という対応が行われたのでしょ

う。もうそろそろ、子どもに対して大人が持つ性のステレオタイプを押し付けるのではなく、子どもたちがその子のままでいられる社会にしませんか？」と訴えたかったんです」

「ここでの論点は、男女で分けることが、学校教育に依然として根強い「性によるステレオタイプ」の押しつけになること、性的少数者への配慮に欠けるということです。

#### 4 学校教育中でのジェンダー意識

この記事が出た週は、私が担当する「教育原理」の授業で「隠れたカリキュラム」を扱う回だったため、受講生に意見を聞いてみました。男女別分散登校に問題があるかないかについては、ほぼ半々でした。例えば以下のような意見です。

《私は、男女の分散登校に賛成です。確かに男女で分けることは、今の時代にあつておらず、別の分け方を選択するべきだと考える人もいると思います。しかし、住んでいる区域や出席番号、クラス、学年で分けることで人数調整が必要になってしまった場合、先生の無駄な作業が発生し、仕事が増えてしまいます。その時間を消毒などの感染症対策に充てた方が有効的です。また、男女で

分けることでトイレの消毒も半分で済み、清潔な状態を保てます。》

《私は問題があると考えます。これによって意識しなくても性別によって分けることが基準になってしまうと考えるからだ。例えばLGBTで悩んでいる人にとってはこの選択は苦痛だと思う。それに小さいころから男女別での行動が植えつけられるとそれが普通感覚になってしまふ。これこそ隠れたカリキュラムにもつながるのではないかと感じる。》

確かに、分散登校自体が「人権侵害」であるとは言えないでしょう。また新学期で名簿が整わない状況で「グループ」に分ける時、とりあえず男女で分けるのが便利だという事情もありました。ただ問題視している人が主張するのは、これが学校の日常の延長にあるということに疑い。普段から男女で分けることに疑

問や問題意識を持っていないからこそ、非日常の場面でもそれが現れるのです。そしてこれは性的少数者だけに関わることでなく、すべての子どもの意識に影響していると言えます。

#### 5 おわりに

コロナ禍によって顕在化したジェンダー問題は様々あります。休校になった時に子どもの面倒を見るのは母親であるとされました。職を失った人の多くは女性です。他方で医療や介護の最前線に立つ人の多くは女性です。そのような問題から見れば、分散登校は些細なことかもしれませんが、それが、そのような些細なことの積み重ねが、大きな社会問題につながっています。そのような視点から学校でのジェンダー意識を捉える必要を改めて感じています。





# コロナ禍で学校再開に向けて 揺れるブラジル

コロナなど全く気にしない言動で有名なボルソナロ大統領の態度とは裏腹に、ブラジルのコロナ感染拡大は続いており、2021年1月末現在、一日平均5万2000人強の新規感染者が報告され、ブラジルのCOVID-19感染者は累計911万人、死者は22万人に上っています。

ブラジルでは、2020年3月下旬以降、学校の対面授業は2021年1月末現在までほぼ休止しています。10か月間以上にわたり、幼稚園も小学校・中学校も高校も、生徒たちは友達に直接会えない状態が続いています。

ここでブラジルの現在の学校の状態を概観しておきましょう。ブラジルの新学期は2月から始まるのが一般的ですが、本稿を執筆している2021年1月31日現在においても学校再開の見通しは不透明なこ

ろが少なくありません。2020年の学年暦は学校閉鎖の影響で、非常に混乱しています。2021年1

月20日付Folha de S. Paulo紙の記事によると、報道時点で2020年度の授業が終了しているのは、全27州・連邦区のうち、半分の14州のみで、残り13州は継続中でした。また、2020年度にリモート授業を行っ

ていない州も1つありました。さらに、2021年度の新学期開始時期についても、すでに1月に開始した州が1つありますが、あとは2月が12州、3月が6州、4月と5月が各1州、さらに未定となっている州が6つあります。2021年度の授業形式も、全て対面授業とするのが4州、全てリモート授業とするのが3州、対面とリモートの両方を組み合わせたハイブリッド型が9州、ハイブリッド型もしくはリモートのみの

どちらかにする予定が3州で、未定となっている州が8つあります。

また、すでに2021年度の新学期開始時期や形式が決まっている州であっても、ぎりぎりまで状況は全く読めません。例えば、サンパウロ州では、新学期について、私立学校は2021年2月1日以降に、州立学校は2月8日に、サンパウロ市立

学校は2月15日から、出席生徒数を定員の35%までに制限するという条件で対面授業を再開する計画でした。しかし、公立学校教員組合がこの計画の差し止めを求めて裁判を起こし、新学期開始予定日直前の2021年1月28日にサンパウロ州地裁が州内の学校の対面授業再開を差し止める決定を下しました。判事は対面授業再開のための安全面の保証が十分でないため、少なくとも教職員へのワクチン接種が終わる

までは対面授業を待つように求めたのです。ところが、なんと翌1月29日に今度はサンパウロ州政府が控訴した結果、前日の決定が覆され、当初の予定通りに対面授業が再開される運びとなりました(2021年1月31日現在)。学校再開をめぐる混乱ぶりがひしひしと感じられます。

もちろん、あくまでも対面授業再開の是非は、コロナ感染状況に依ります。しかし、感染ゼロを待つことはできない中、対面授業のメリット・デメリットを天秤にかけて判断するしかありません。言い換えれば、子供たちの集団の中の育ち・学び、教育に重きを置くか、感染リスクを減らして命の安全・健康を重視するか、の綱引きです。サンパウロの朝令暮改の対面授業再開決定は、まさにこの二つのせめぎ合いといえるでしょう。



う。

対面授業再開賛成派の代表的な意見は、パンデミックによる学校閉鎖が、ブラジルの子どもたちに深刻な影響を与えているので、対面授業を再開した方が望ましいというものです。

学校閉鎖の影響の一つが、中途退学の増加です。現地の研究機関が2020年11～12月に行った調査によると、中途退学率は高校で10・8%、小学校・中学校で4・6%でした (Folha de São Paulo、2021年1月22日付記事)。2019年の中途退学率は、高校で4・8%、小学校・中学校で1・2%でしたから、コロナ禍で中退者が倍増したことが分かります。中途退学の主な理由は、経済的な理由 (学費負担)、授業がなかったこと、そして遠隔授業が行われてもアクセスするのが困難だったことが挙げられます。また中途退学は、貧困層ほど高いという結果もでており、ブラジルの社会階層間格差が広がるのではないかと懸念されています。対面授業に戻れば、家庭内での学習環境が整っていない貧困層の家庭の子供でも教育を受けられるというわけです。

また、対面授業がないことによっ

て引き起こされる心理的ダメージを重大な問題と捉える人々も対面授業の再開を求めています。例えば、小児科医のグループが出した対面授業の再開を求める声明では、10歳未満の子どもの感染率は低く、その症状も最軽度であることから、感染リスクよりも、子供たち間で不安障害、うつ病、自傷行為が増加していることを問題視しています (Folha de São Paulo、2020年12月6日付記事)。就学前の幼児においても、幼稚園の閉鎖により、何か月も家にいるという社会的孤立の状態に置かれることで、子供たちはストレスを感じ、感情的に不安定な兆候を高めると推測され、さらにそれらのストレスや不安は識字能力を妨げる可能性があるといわれています (<https://revistapesquisa.fapesp.br/os-desequilíbrios-emocionais-de-crianças-na-pre-escola/> 2021.1.31最終閲覧)。このようなメンタルヘルスの観点から、安全な方法で学校の対面授業を再開することが求められています。

一方、対面授業再開に反対する人々もいます。代表的な存在は、18万6千人を有する公立学校教員組合です。既述したサンパウロ州の

裁判でも、対面授業再開計画の差し止めを求めています。組合は、教師のワクチン接種と安全が保証されなければ、新学期に対面授業を再開させることはできないと主張しています。

また保護者の中には、対面授業の再開を望む声もあれば不安視する声もあります。政府・自治体は、最終的に対面授業に参加するかどうかは保護者次第であるとしています。が、これも難しいところのようです。現地報道の中には、ブラジルにおいては、学校再開を支持するかどうかは政治的イデオロギーと関係づけられているという指摘も見られます。つまり、学校再開を望む人はボルソナロ大統領支持者でコロナ楽観主義者であり、学校再開に反対する人々は大統領のアンチで、命を守りたい人というという見方がされるというのです。

イデオロギーを超えて、ブラジルは安全で安心できる学校生活を取り戻すことはできるでしょうか。ブラジルの今後の動向から目が離せません。

最後に、日本にあるブラジル人学校の状況についても簡単に触れておきましょう。在名古屋ブラジル総領

事館関係者の話によると、2020年4月の緊急事態宣言中は、政府の要請に従い休校になった学校が多かったのですが、2度目の緊急事態宣言下の2021年1月現在、ほぼ全ての学校で通常通りの対面授業が行われており、数校が対面とオンラインのハイブリッド型を採用しているようです。また短縮労働や失業による親の収入が減少したことからも月謝滞納や退学が相次いでおり、運営に苦慮するブラジル人学校も新聞やテレビで報道されています (例: MBS テレビ「Newsミント」内『特集』2020年10月13日放送)。先の見えないコロナ禍をどのように乗り越えていくのか、日本の学校同様に、ブラジル人学校の模索は続きます。



1日も早く学校で皆で遊べるようになるといいね  
(2008年ブラジリアの公立小学校にて。筆者撮影)



# 3人称の well-being を目指して

## 1 新たな学校教育システムの必要性

新型コロナウイルス感染症については長期的な対応が求められる状況となっております。文部科学省は「新型コロナウイルス感染症に対するためのガイドライン」を示しました。この中で子ども、保護者、教職員には様々な変化への対応が求められています。新たな生活様式への対応はもちろん、分散登校や臨時休業への対応、部活動や学校行事の中止や縮小への対応など、枚挙にいとまがありません。また教職員には、オンライン授業、子どもへの健康チェック、校内の消毒などの対応も求められています。単純に考えても全員がマスク着用で表情が見えづらく、会話も控える状況は学校教育のコミュニケーションの質を変化させるでしょう。一方、このようなコロナ禍の状況は、意図せずこれま

で当たり前とされてきた学校教育の価値を照射したとも考えられます。また、ICTによるオンライン授業

の活用など新たな学校教育の価値も照射したと考えられます。いずれにせよ、新型コロナウイルス感染症の収束が見えない中、今後どのように学校教育を運営すべきか、感染対策と学校教育を両立する新たなシステムの構築が求められています。

## 2 二分法的思考から柔軟な思考へ

このように学校教育で新たなシステムを構築しようとするときに散見される議論として「二分法的思考」が散見されます。二分法的思考とはものごとを「白か黒か」「善か悪か」のように二項対立的に捉えようとする思考形態です。例えば、ICTによるオンライン授業は必要か、不必要かといった議論です。一昔前には

学校教育にスクールカウンセラーは必要か、不必要かといった二分法的思考の議論もありました。ここで重

要なのは、必要か不必要かの二分法的思考ではなく、「選択肢を増やす」という「柔軟な思考」だと思われる。必要な人もいれば、不必要な人もいる。ならば必要な人にも対応するシステムを考慮するという話です。

近年、学校教育のみでは対応が容易でない、子どもの多様な援助ニーズが発生しています。つまり、従来の「教師個人の力量のみに頼る学校教育」という「学校」の「社会的カテゴリー」（社会現象を整理する枠組みについての認識）の転換が必要になっています。そのため、子どもの多様な援助ニーズに対応しつつ、子ども、保護者、教職員をエンパワーメントするシステムの構築が求められています。

## 3 生態学的なシステム構築の必要性

学校心理学では「環境の中の子ども」という視点が重視されます。たとえば「生物・心理・社会モデル」では、子どもの置かれている困難な状況は、生物システム、心理システム、社会システムの「入れ子構造」であり、それらが相互作用していると考えます。そのため、その子ども特有の脳や遺伝といった生物システム、その子どもの認知、感情、ストレスなどの心理システム、その子ども、その子どもとの社会システムがアクセスメントの対象となります。また、「生態学的システム理論」でも、人間の発達過程は個人と環境の相互作用によって形成されると考えます。このシステム内およびシステム間の相互作用は「マイクロシステム」「メゾシステム」「エクソシステム」「マクロシステム」の4種類で構成さ



多くの子どもにとって人生の「目的」の1つは well-being、つまり主

#### 4 子どもの well-being のための柔軟なシステム

れ、「入れ子構造」になっています(図)。つまり、子どもは本人の遺伝的要因をベースに、家庭、学校、地域など、様々な「環境」と相互作用を行う中で発達しています。しかし、かつての日本では「社会システム」や「マイクロシステム」の1つである「学校」のみに子どもの教育問題の原因を帰属させ、スケープゴートにする不自然な風潮も見受けられました。このような状況も踏まえ、昨今「チーム学校」が推進されつつあります。「コロナ禍の分散登校や臨時休校に伴い、子どもの居場所づくりが必要とされる今、教育の「当事者」が家庭、学校、地域であることを生態学的な観点から再確認する必要があります。この状況は子どもの「マイクロシステム」が有機的に連動する「メゾシステム」の構築を押し進める1つの機会となるかもしれません。また、「エクソシステム」である文部科学省や教育委員会は、政策レベルでもこのようなシステムの構築を推進する必要があるかもしれません。

観的幸福感を感じながら日々生活することでしょう。学校へ通うこと、塾へ通うこと、習い事をする 것도その「目的」に向けての「手段」です。しかし、その「手段」に強い不適應を感じつつも、そこに適應すること自体が目的となり苦しむケースもあります。手段が目的化してしまう「手段の目的化」です。社会性育成の観点から既存の社会システムに適應するための努力は非常に重要です。一方、一部の非定型発達の子どもやマルチトリートメントを受ける子どもなども、特別な援助ニーズを抱える子どもにとってそれは主観的苦痛を伴い、二次障害を引き起こす場合もあります。そのため一定の範囲内で選択肢を増やす「環境調整」も成熟した社会には必要かもしれません。つまり、まずは可能な限り多くの子どもが1人称「私」の well-being を目指せるよう柔軟なシステムを構築することが求められます。例えば1つの空間に著しく適應が困難な場合には、生態学的な観点からその子どもが適應しやすい他の空間の選択肢や援助資源があることが望ましいでしょう。この1人称の well-being を目指すことが、ひいては2人称「私」とあなた」の well-being、3人称「私

とあなた、彼、彼ら」の well-being と相互作用していくかもしれません。

#### 5 おわりに

行動遺伝学で明らかになっているように、遺伝と環境の組み合わせによる子どもの多様性は天文学的な数値であり、1人として同じ子どもは存在しません。皮肉にもこのコロナ禍で学校教育は柔軟な対応を迫られ、オンライン授業など子どもが多様性に対応するシステムの構築が進みました。教育には不易と流行があ

るため、新たなシステムの構築には慎重な姿勢が求められます。しかし、このコロナ禍の状況だからこそ「チーム学校」の理念をもとに、子ども、保護者はもちろん、過重な負荷がかかっている教職員をエンパワーメントする生態学的なシステム構築をより推進することが求められているのかもしれません。

【参考文献】  
Santrock, J. W. (2008). Child Development. Twelfth edition. New York: McGraw-Hill Companies, Inc.

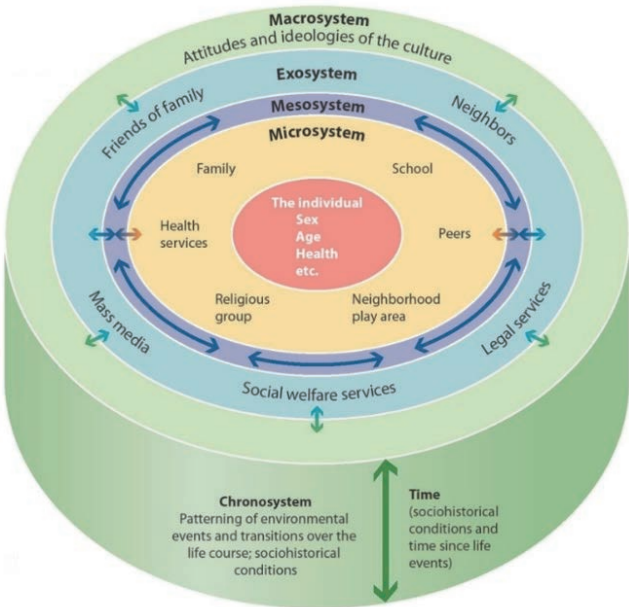


図 生態学的システム理論 (Santrock, 2008, p.347)



# コロナ禍で真価が問われた

## カリキュラム政策

### 1 まさかのパンデミック

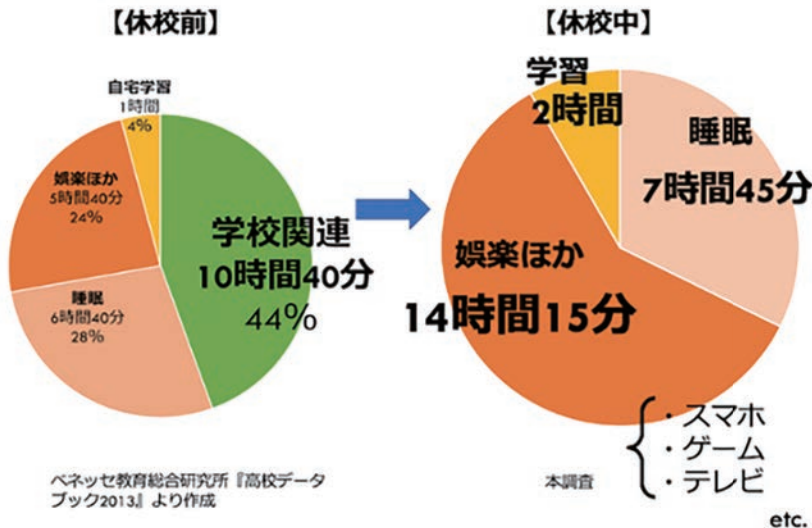
まさか自分が生きている間にパンデミックを経験するとは思っていなかった……。多くの方がそう感じてもらえるのではないのでしょうか？ 私もその一人です。2020年3月2日から前代未聞の全国一斉臨時休校措置がとられ、学校教育は一時的に機能不全に陥り、混乱の渦に巻き込まれました。しかし、「学びを止めるな」というスローガンのもと、各地において様々な教育関係者らが知恵を出し合い、逆境に立ち向かったわけです。

本稿では特に「休校期間中／学校再開後に何が起きたのか」に注目し、その際、見受けられた現実の一端を直視することで、今後に向けたチャレンジを私なりに引き出したいと思います。

### 2 休校期間中に何が起きたのか？

一斉休校によって、学校がこれまで果たしてきた教育機能や福祉機能がはつきりと顕在化しました。その重要性や必要性を再認識した人は多いはずです。他方で、休校のおかげで、学校のもつ権力性や強制力は弱まり、ある意味では「等身大」の子どもの姿を確認することができたとはいえます。

ここで興味深いデータを紹介しておきます。立教大学経営学部中原淳研究室が休校期間中に高校生らを対象に行った調査結果です（高崎ほか、2020）。図の通り、休校中の高校生の学習時間は激減し、「娯楽ほか」の割合が増えました。学習時間を比較的多く確保していた高校生は「提出必須」の課題が出されていたようです。高度なオンライン支



図：高校生の生活実態の変化（高崎ほか、2020）



援の有無は関係ありませんでした。学校が「やること」を明確に指示しない限り、「何をしようのかかわらない」高校生は約6割を占めていたと言っています。もちろん、この結果を一般化するべきではありませんが、これが現実の一端であることは確かです。

### 3 カリキュラム政策の真価を問う

私は別に「子どもたちよ、しっかりせい」と言いたいわけではありません。むしろ、この有事に至るまでの長きにわたるカリキュラム政策の真価が問われている、そう主張したいのです。平成29・30年に学習指導

要領が大幅に改訂され、かなりの注目を集めています。「目新しさ」が強調されるくらいありますが、大きな改革の方向性は臨時教育審議会（1984～1987年）以降の「新しい学力観」に基づくカリキュラム政策から基本的には変わっていません。1989年に学習指導要領が改訂される際の教育課程審議会答申では次の通り、記載されています。

これからの学校教育は、生涯学習の基礎を培うものとして、自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応で

きる能力の育成を重視する必要がある。：（略）：生涯にわたる学習の基礎を培うという観点に立つて、自ら学ぶ目標を定め、何をどのように学ぶかという主体的な学習の仕方を身に付けさせるように配慮する必要がある。その際、自ら学ぶ意欲を育てることが特に大切であり、幼児児童生徒に活動や学習への適切な動機を与え、学ぶことの楽しさや成就感を体得させるように配慮しなければならぬ。

（教育課程審議会「教育課程の基準の改善について」（最終答申）、昭和62年12月29日）

いかがでしょうか？ その後、「生きる力」が提唱され、学力低下論争など紆余曲折はありましたが、約30年強の月日が経過しました。果たして「自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」「自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性」「たくましく生きるための健康や体力」はどこまで発揮され、実現できていたでしょうか？ あわせて、休校中はもちろん、学校再開後、学校・

教師はこのことをどれだけ意識して、学習内容や方法を吟味し、学びのサポートができていたでしょうか？ 教科書を全てこなすことに固執し、学校再開後は遅れを取り戻すために「子ども不在」で学校行事を縮減、教科学習のスピードアップに躍起になる、そうした現実もまた多く見られたわけでは

### 4 「心躍る」学校づくりへ

改めて考えてみれば、学習指導要領「自体」の評価計画はどうなっているのでしょうか？ 私は見聞きしたことがあります。それが事前に定められていないのにどうやって成果と課題を総括し、改革や改善を試みてきたのか、極めて謎です。社会的要請への対応が最優先されがちですが、条件整備の適切さを含め、政策評価をもっとしっかりとやるべきでしょう。

他方で、自治体や学校もまた、学習指導要領改訂の「目新しさ」に踊らされるのではなく、それを批判的に読み解くことで、常に目の前の子どもたちにとって何がふさわしいのかを自律的に思考・判断し、学校教育をリ・デザインしていく必要があるでしょう。このコロナ禍にお

いて、「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）」をトピックに取り上げて、組織的に探究的な学びを共創した学校はどのくらいあるでしょうか？ 自分が担当する教科の学習で本格的に取り組んだ教師はどのくらいいるでしょうか？ 今だからこそ学ぶ価値があるのです。私だったら何よりも優先させてチャレンジします。子どもたちは魅力的でおもしろく、タメになる学びに飢えている、私はそう思います。子どもも教師も「心躍る」学校づくりへ。草の根からチャレンジできることはたくさんあります。Be Creative!!

#### 【参考文献】

- (1)高崎美佐・村松灯・田中智輝・中原淳（2020）「立教大学経営学部中原淳研究室そのとき学びに何が起こったか：高校生の学習時間に焦点をあてて 新型コロナ感染拡大による学習環境の変化に関する調査報告会」当日配布資料」[http://www.nakaharalab.net/blog/wp-content/uploads/2020/06/online\\_manabitorneruna2020-1.pdf](http://www.nakaharalab.net/blog/wp-content/uploads/2020/06/online_manabitorneruna2020-1.pdf) (2021.01.26最終閲覧)
- (2)文部科学省（2020）「新型コロナウイルス感染症の影響を踏まえた公立学校における学習指導等に関する状況について（令和2年6月23日時点）」[https://www.mext.go.jp/content/20200717-nxt\\_kouhou01-000004520\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200717-nxt_kouhou01-000004520_1.pdf) (2021.01.26最終閲覧)



# オンライン学習による

## 学習権の保障

### 1 オンライン学習の可能性

オンライン学習には大きく2つの形態があります。1つはWeb会議システムなどを活用してリアルタイムで双方向型の学習をする同期型です。もう1つは予め収録されたものを利用して学習するもので、非同期型とされます。後者は、事後学習だけでなく、事前学習の充実にも期待できます。たとえば「反転学習」です。両者の特徴を踏まえれば、オンライン学習は次のように教育観を転換できるでしょう。これまでのような「特定の時間」に「学校」で「自校の教員」から学ぶという限定された学習機会に更新を迫ります。「いつでも」「学校ではない場所でも」「自校の教員でない人からも」学べるという学習機会が提供されることは、学習機会の拡充、ひいては学習権の保障につながります。

ここでオンライン学習と対面学習との優劣の議論はしません。両者にはそれぞれ固有の長短があるので、対立し合うものではありません。それぞれの長所が互いを補完し合うことを認識し、それぞれの必要性に応じて柔軟に取り入れることこそ重要です。

日本は教育への公的支出が諸外国と比較して低いことが指摘されています。教育支出が家庭に依存している、家庭の経済的な格差が学力格差につながっています。オンライン学習も同様で、その基盤であるICT環境の程度が、このコロナ禍において更なる教育格差を生み出していると言われます。子どもたちの学習権を保障する手段の一つとしてオンライン学習を奨励し、そのためのICT環境の拡充整備が必要です。子どもたちの学校外学習はどうしても

家庭の経済力に依存しますから、経済的に恵まれない家庭の場合、それを学校教育（公教育）の拡充で補うのです。その一手として「学校での授業」を学校だけでなく、放課後でもアクセスできるようにするのです。

### 2 オンライン学習、なぜ低調？

学校におけるオンライン学習は、今に始まったことではありませんが、現在のような形で議論が盛んになっただききっかけとして、GIGAスクール構想とコロナ禍の影響を挙げることができません。

こうした流れはオンライン学習によつて、子どもたちの学習権を保障する可能性を高めてくれるに違いありません。一方で、多少の懸念もあります。一つは財源です。「導入のための整備」（インシヤルコスト）には莫大な予算が充てられていますが、「今

後の更新整備」（ランニングコスト）としての予算については不明です。ICT機器やそのソフトには更新等への予算も欠かせませんが、これが受益者負担となってしまったら元も子もないのです。もう一つは、授業の質です。これは対面にもオンラインにも関わることで、画面越しでもワクワク・ドキドキして学べるよう、対面とは異なる工夫もまた求められます。これらはいずれも教育行政に対して覚悟と真摯なバックアップを求めます。

ここで内閣府による「新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査」を取り上げます。この調査はWebを介して実施され、10128名（うち5212名は継続サンプル）を対象に、第1回は5月末から6月初旬、第2回は12月中旬に行われました。



その結果の一部を図に示します。この質問への回答は小学生・中学生の子を持つ親となっています。

図中、オンライン学習の経験を尋ねた1から7の項目の回答を合計すると全体の45・1%（第1回）／23・8%（第2回）となります。ここから両回とも半数以上がそうした経験がありませんでした。また、オンライン学習を受けたという回答が、第1回から第2回にかけて20ポイントも低下しています。オンライン学習が対面学習との相互補完的な方法として考えられているのではなく、あくまでも対面学習ができない間の代替でしかなく、「仕方なく」取り入れた、とみることができず。また同調査では小学生以上18歳未満の子を持つ親に対して、オンライン学習の利用希望も尋ねていて、完全な対面教育を希望した回答は第1回調査時で24・4%、第2回調査時は43・9%になっているということも見逃せません。

オンライン学習の導入が低調であること背景には、保護者だけでなく、新しいことを忌避する学校や教育行政の意識の問題（訓練された無能力）もあるでしょう。もちろんICT環境整備には予算が必要で

し、教員の習熟には時間がかかるという実務上の課題もうかがえます。

### 3 リーダーシップのこれから

学校や教育委員会に関わって強く感じることは、校長や教育長の考え方が学校経営や教育施策に大きく影響することです。「コロナ禍のオンライン学習を推進するため、最優先して最上級生にタブレットやモバイルルーターの貸し出すという意思決定を、自治体の長と相談しながら迅速に行っていた例があります。このようなりーダーは、アンテナを高くして情報収集し、正解ではなく、その時々最適解を模索しています。「どうせ」ではなく「どうすれば」を重視しています。何よりも「自身の言葉」で語っています。そこには「前例踏襲」や「思考停止」といったことはありません。これからの時代、子ども学習機会を保障するためには、私たち自身の新しいものに対する認識、とくに忌避感をまずは改めて、「できるところから」「とりあえず試してみるか」という最初の一步を踏み出すことが重要です。チャレンジすることを忘れてはいけません。「ミイハーであること」、それが鍵を握るのかもしれない。

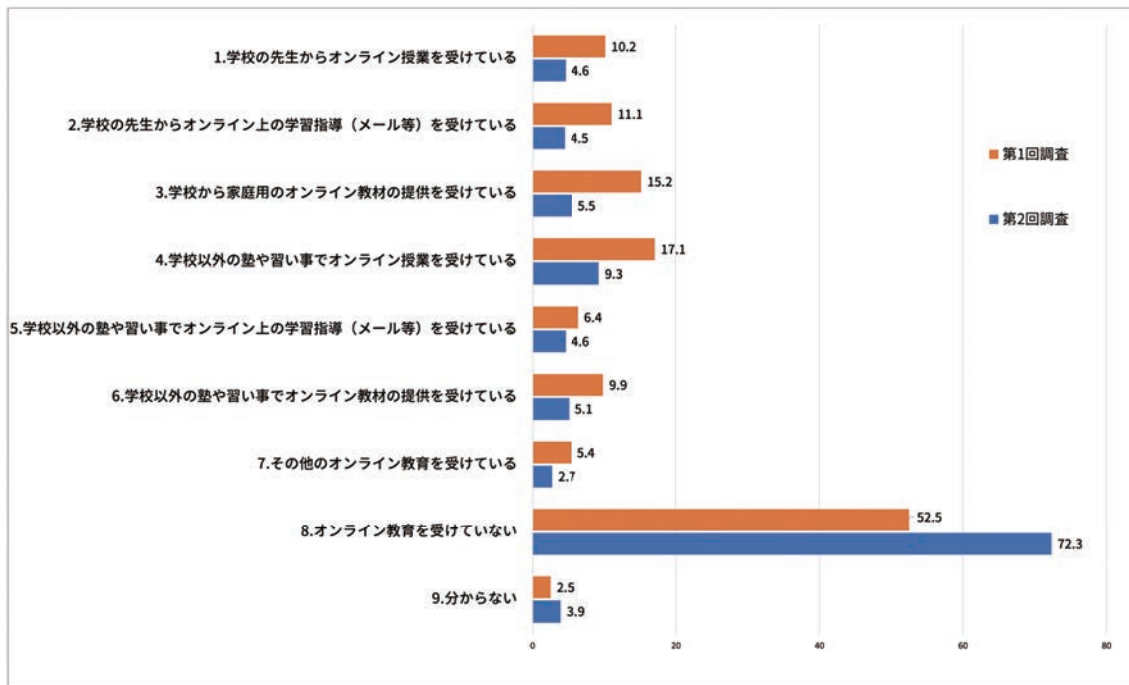


図 ICTを活用した学習機会の状況（内閣府2020のデータをもとに筆者作成）

【参考・引用資料】  
 内閣府（2020）『第2回 新型「コロナウ」ルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査（20201224）』  
[https://www5.cao.go.jp/keizai2/manzoku/pdf/result2\\_covid.pdf](https://www5.cao.go.jp/keizai2/manzoku/pdf/result2_covid.pdf)  
 （2021.01.12 最終閲覧）



# 「生徒の成長と共に」

## 「コロナ危機でのチャンスを考える」

「先生、今年のビジネスプランングランプリに、参加したいのですが」と4月の始業式の日S君は職員室にきました。新型コロナウイルスによる緊急事態宣言が出された直後でした。「今年は中止みただよ」と話す「やっぱり」とがっかりした様子でした。「どうして参加したいと思ったの?」と問うと「先輩たちの発表がすごくて、やってみたいと思いました」と同じバトミントン部の先輩の名前を挙げたのです。

リサーチワーク・ディスカッション・プレゼンテーション・振り返りを毎回テーマを変えて繰り返して取り組んできた、週一回2時間の進路学習の成果と地域や地域経済の理解の場として応募してきた国民政策金融公庫主催の「高校生ビジネスプランングランプリ」のことでした。当初「東京大学でプレゼンできるなんて素敵

じゃない? 頑張らない?」と参加者を募って参加しました。上位10組は東京大学の最終審査会でプランをプレゼンできるのです。2015年に初めて応募し、上位20組に入り発表はできなかったのですが、見学と交流会に生徒と共に参加できました。参加に過ぎなかったのですが、生徒の意識に変化が見られ、起業を学べる学部に進学する生徒も現れました。でも、単に起業する意識のため

の参加ではありませんでした。もちろん、表現力を学ぶと同時に「地域」に関心をもち、地域を理解してほしかったのです。高校3年生は、参政権もできましたが、地域のことをしっかり理解している生徒は少ないです。地方では人口減と嘆きますが、高校生が地域外で学んで戻ってくれば人口は減少しないと思えます。以来、5年連続で20位以内に

入り毎年生徒たちと東京大学へ参加できました。テーマと成績は以下の通りでした。2016年と2017年には連続で最終審査会でプレゼンできたのです(オンラインで配信中)。

- 2015年度、応募数2333件、セミナーファイナリスト(ベスト20)、「ものづくり」～室蘭の心をつなぐ「お助けDIY」～
- 2016年度、応募数2662件、ファイナリスト(ベスト10)、「旅人と地元民の心をつなぐ」おもてなしサロン「へようこそ」
- 2017年度、応募数3247件、ファイナリスト(ベスト10)、「オール室蘭が本気で作り上げたB級グルメ」
- 2018年度、応募数4359件、セミナーファイナリスト(ベスト20)、「室蘭だんばら」GO! キッズもシニアも旅行者も! 体験型アクティビティはACTRANにお任せ!」
- 2019年度、応募数3808件、セミナーファイナリスト(ベスト20)、「鉄の街室蘭からの贈り物」くいつまでも元気で自分の爪切りたい」

ビッグデータを調べ、校外へ出かけてヒアリングし、街頭や全クラスにアンケートしたり、その年で生徒の取り組みアイデアに感心するばかりでした。青年会議所、市役所、老人福祉施設、工業大学、病院、ものづくりの鉄の工場など毎回、地域の方々とながら、応援して育てて頂きました。本校は部活動も盛んで、全国レベルの運動部や吹奏楽部に所属している生徒も多く忙しくて、スケジュール調整係が苦労して放課後や昼休みに時間を作っていました。

2016年から、東京大学公共政策大学院主催の「チャレンジ!! オープンガバナンス」へも参加しました。これも上位13組が東京大学の最終審査会でプレゼンできるのですが、一般社会人の方や大学生も対象になります。2016年と2018

年には最終審査会へ進みました。2016年には、多くの大人や大学生の中で唯一の高校生でしたが、全体3位で学生賞を受賞しました(オンラインにて配信中)。これは、夏休みに市役所のICT推進課の方や経産省の方にビッグデータやRESASについて丸一日教えて頂き大きな学びになったおかげです。実は私はそこに魅力を感じていました。地域のことが数字でも理解できるのです。そして、そのことがきっかけで東京大学公共政策大学院の教授にも3年生へ1時間授業をして頂いたことは、生徒にもよい経験になりました。

室蘭市役所でデータを調べたことから、2018年から始まったオープンデータを用いて自らのまちの魅力をプレゼンするという「シビックパワーバトル」へ参加しました。これは、テーマに従って各市を3分のPR動画でプレゼンし、上位3チームが全国大会へ市長と共に参加でき、最終審査会でプレゼンできるのです。

○2018年、テーマ「住む」で予選一位通過、最終審査会浜松市にて最優秀賞  
○2019年、テーマ「私の好きな○○市」で予選一位通過、最終審査会千葉市にて2位(オンラインにて予選本選配信中)

最終審査会へ室蘭市長と参加することができたことは生徒の地域への理解の深まりにもつながったようです。翌年、私は「室蘭学」を年間8回設定し、その中の一回を市長へお願いして「室蘭の未来」と題して3年生へ授業していただきました。

このように書いてくると、なんだかコンテストの入賞を目標にしていると思われそうですが、私は、全国大会へ参加できることで他校の生徒たちの発表を直に学びコミュニケーションをとることで視野を広げることができるチャンスと思っていたのです。自ら考え、リサーチし、話し合い協力し、学びを深めて身に付けていく。そんな自立的学習、教科横断の学習、他との学びあいの共有こそ大切だと考えています。これら3つのコンテストによって生徒は視野を広げ成長のきっかけになったと思っています。新型コロナウイルスの広がりの中で、今年にはオンラインで開催すると聞きJICA北海道主催の「高校生国際協力体験プログラム」や獲得型教育研究会主催の「高校生プレゼンフェスタ」に希望者を募って参加しました。いずれも生徒たちの振り返りは「読むだけでなく参加することで分かったことが沢山あった」と学びの深

まりをあげていました。多方向オンラインのおかげで、東京まで行かずに参加でき、全国大会を控え忙しい女子サッカー部の生徒も時間を作って参加できたのです。オンラインは、教育のチャンスを全世界に広げてくれたのです。

私たちは、このコロナ危機で大きなチャンスを与えられているのかもしれない。教育の変革へのチャンスなのかもしれません。メルケル首相の側近の一人 Jeremy Beckett は著書「限界費用ゼロ社会」のなかで、今後「消費・所有」を前提とした資本主義が後退し、共有型経済が主流になると予想しています。その共有を推進するための精神力、他者への共感が重要になると述べています。

また、トヨタ自動車の豊田氏は、「自分以外の誰かの幸せを願い行動する。人類がともにありがとうと言い合える関係を作る。企業も人間もどう生きるかを真剣に考え、行動を変えていく。Yourの視点を持つ人財を育てる。」と述べています。社会には「たくさん子供たちが、周囲を大事にし協力し、自ら学び、表現できるように、少しでも学校教育の中で育みたいと願うばかりです。コロナ禍の学習環境の中でも子供たちは、たくま

しく学び育っています。「教育は人を作り、人が社会を作り、教育は教員次第」と心に命じて教育に向かっています。

古くから疫病が日本でも流行したと多くの書物に記されています。鎌倉時代の「蓮如上人・疫病の御文」や善信の「親鸞聖人の御消息」の中にも記され、あわてず仏恩報謝の念仏を唱えようと述べています。私も今、あわてず、しっかり教育を見て、他者を大事に自立して学びを深めることのできる生徒の育成に取り組みたいと思います。

実際のプレゼンの様子は  
こちらのQRコードから



【参考文献】

- (1)「限界社会ゼロ社会(モノのインターネット)と共有型経済の台頭」  
ジエレミー・リフキン著、柴田裕之翻訳  
トヨタ自動車株式会社2020年3月期  
決算説明会II部 社長メッセージ(5  
月12日発表) より  
<https://global.toyota.jp/newsroom/corporate/32486196.html>  
(2021.01.15最終閲覧)





# オンライン授業をめぐる冒険

PC操作が大の苦手、スマホ拒否のガラケー愛用者、そんな私に襲いかかった「コロナ」という悲劇。「対話をめぐる学びの冒険」これが授業「ア」の私にはこの上ない試練、でも、ここで、オンライン授業ができなければ……と、追いつめられる弥生三月。

そんなアナログ人間が「動画による授業」を開始したのですから、私を知る学生・仲間・友人からは、驚きの悲鳴。かつて大学時代、情報処理の教授はおっしゃいました「わからないへビーな学生の状況は、君をみていたら、わかるー」と。また、あるとき、新たな職場で、PCを前に茫然自失の私。同僚が一言「何か、困ってる?」「PCが動かないんです!」電源ONができない私に皆は騒然。そんな私が「動画授業」制作を決意したのですから、それからの物語は「想像どおり、日々「カオ

ス」。ですが、《Heaven helps those who help themselves》(天は自ら助くる者を助く) 高校時代に暗記した、あのことわざ通り、救世主(Mr. Yumi) が登場し、動画作成のイロハを私に伝授くださったのです。教わった「loom」アプリをつかうと、「すこいっ!」パワポの一部に顔がのぞく、TVでよく見るあの「ワイプ」で私が登場。願ったり叶ったりの「動画授業」つくりが、「師匠」の助けでスタートです。

「生徒指導・進路指導」の授業において、必ず扱う「差別・偏見」というトピック。今年「Black Lives Matter」とからめたい、どんな素材を使い、どんな風に授業を展開するか、頭の中が動き始めます。「ウォーミング・アップ」で、私の中に潜む「ぶつっ」に気づき、そこから、事件に迫り、背景を知り、自身の生活と

対面授業と変わらず。しかし、リアルに接しえないハンディをオーバーカムするために、より面白い、ディープなパクトの「素材」探しがマストとなったのです。ところが、そんな修行の日々が、私に「授業づくり」とは何かを改めて考えさせてくれたのですから、禍福は糾える縄の如し。

ある日の授業風景から……

「私の中に潜む、アンコンシャス・バイアスに気づけ!」

「生徒指導・進路指導」の授業に

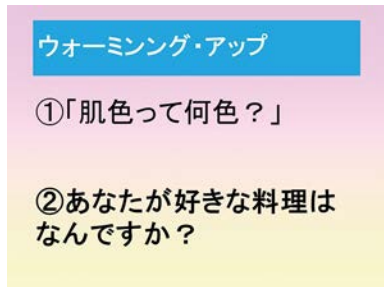
リンクし、考える。「私の中の潜むアンコンシャス・バイアス」そんなキーワードが浮かんだところで、具体的な素材探しがスタートです。

興味にスイッチON! はっと気づき、もっと知りたい気持ちに拍車がかかる、そんな授業づくりの重要要素がウォーミング・アップ。「思いを



興味にスイッチON! はっと気づき、もっと知りたい気持ちに拍車がかかる、そんな授業づくりの重要要素がウォーミング・アップ。「思いを

声に出す勇氣」「動き出せるカラダ」  
 そのために、対面に授業で重視した  
 ウォーミング・アップは、オンライン  
 授業においても、大いなる「スグ  
 レモノ」でした。ウォーミング・アッ  
 プが、学びの潤滑油となり、学び  
 を促進するエナジーとなっている、そ  
 れに気づいたのがこの「Black Lives  
 Matter」の LESSON。

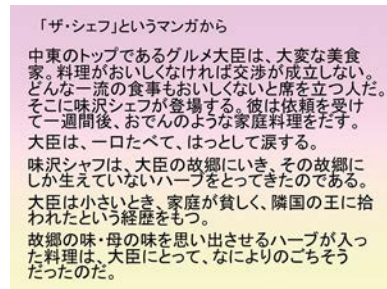


私の中の潜む「アンコンシヤス・バ  
 イアス」に、はっとしたところから  
 「ESSONはスタートです。まずは、「ヘ  
 イトスピーチ」から「私の中の偏見」  
 に気づいた北海道の中学3年生の作  
 文を読み、「Black Lives Matter」を  
 扱う天声人語に、そので、さまざま

な「問い」を投げかけます。事件  
 の実態を詳細に知るためにリサーチ  
 ワークを開始、アメリカにおける黒  
 人差別の歴史的背景を知ることが目  
 指します。私が授業デザインで大切  
 する4つのステップ「知る」「想う」「創  
 る」「動く」、中でも最初の「知る」  
 ことが、すべての学びの始まりです。  
 「知る」（情報力）未知の、異質の  
 情報をどこまで集められるか、オリ  
 ジナルシンキングを鍛えるための大  
 切なステップを経て、初めて「想う」  
 （想像力）を働かせることができるの  
 です。様々な情報を組み合わせるこ  
 とで、私たちは核心を読み取り、先  
 をよむことが可能となるのです。授  
 業は、そこから一気に、天声人語の  
 最後のパンチライン「決して対岸の  
 火事ではない」に迫るべく、現在の  
 「ロナハラスメント」にフォーカスす

るという流れにシフト・チェンジ。再  
 び、「知る」「想う」ワークの後に、  
 そこから独自のひらめきを発酵させ  
 る「創る」（創造力）ステップにジャ  
 ンプです。「Black Lives Matter」「ロ  
 ナハラスメント」を自身の生活に  
 ひきよせ、未来の授業を描く、その  
 「カタチ」実現のために、どのよう  
 に動き、どのような関係作りが必要  
 か、それを考え実践するのが「動く」  
 （実施力）ステップ。これら「知る」「想  
 う」「創る」「動く」、4ステップを貫  
 くものが「イマジネーション」と「ク  
 リエーション」。2つの「そうぞう力」  
 （想像力&創造力）を鍛えるために、  
 「難しいことはやさしく、やさしいこ  
 とは深く」を心して、私は「動画授  
 業」制作に臨みます。

そんな動画「ESSONを受講している  
 学生たちのコメントを少しご紹介し  
 ましょう。  
 『先生が、私のために語ってくれて  
 るようで、聞かれると返事をしたり、  
 対面授業をうけているより、もっと  
 先生と密に話をしているような気が  
 します』  
 『グループワークができないのは、  
 さびしいけれど、具体的に、手を動  
 かし、頭を動かし、言葉を発して、  
 先生と対話してると違和感はない  
 ません。わからないところ、もう一  
 度聞きたいところを、何度も繰り返  
 してみられるのは動画の良さだと思  
 います』  
 『思い付きでなく、ちゃんと考えて  
 文章にしたり、作品作りをする中で、  
 自分の頭の中が整理される気がしま  
 す。毎回、質問に先生がこたえてく  
 ださるし、ミッションにも、いろいろ  
 なコメントをくださるので、次はもっ  
 とこれを調べて挑戦してみようと、  
 学ぶことがとっても楽しくなってい  
 きました』



「知る」「想う」「創る」「動く」4  
 ステップ「動画授業づくり」の中で、  
 私は、今こんなことを思っているの  
 です。「つねに、学生の立場で考えよう」  
 「授業をデザインする力をつけよう」  
 「新たなものに、はっと気づく、そん  
 な感性を磨き続けよう」と。

## 学生たちが語る！

# \ オンライン授業・リモート学習を経験してみた /

コロナ禍において、多くの大学がオンライン授業／リモート学習に切り替えました。一気に ICT の利活用は進んだと言っても過言ではありません。その舞台裏には涙ぐましい努力があるわけですが、肝心の学生たちはオンライン授業／リモート学習をどう受け止めているのか、そのメリットとデメリットを昭和女子大学で教職課程履修中の学生たちに聞いてみました。

一口にオンライン授業／リモート学習と言っても、リアルタイム型（同期型）、オンデマンド型（非同期型）、ハイブリッド型（対面授業と遠隔授業の組み合わせ）、実際には様々なタイプがあるわけですが、ここではそうした区別は気にすることなく、学生たちのコメントから抽出できたキーワードを紹介します！

#通学時間を省ける⇒ストレス軽減 #どこからでも学べる #ゲスト講師を遠方(海外)からでも呼べる #教室の定員数を気にしなくていい #自分のペースで学べる #何度でも授業を受け直せる #周りの目を気にしないで授業に臨める #席移動に時間を割くのが不要 #資料の配布・課題の共有が便利 #プリントがかさばらない #ネット資料(動画を含む)の活用のしやすさ #黒板や資料の見えにくさからの解放 #合理的配慮のしやすさ(字幕など) #教師と学生の距離が縮まる #コミュニケーション量の増加(チャットの活用など) #授業外でも気軽に質問できる(LMSの利用など) #スムーズな意見交換 #色んな人との意見交換 #授業外学習時間の増加 #自己管理の高まり #学ぶ癖や習慣がつく #より多くのスキマ時間を活用できる #災害など緊急時でも学ぶ機会がある #一方通行の授業になりやすい #学生の反応や雰囲気把握しづらい

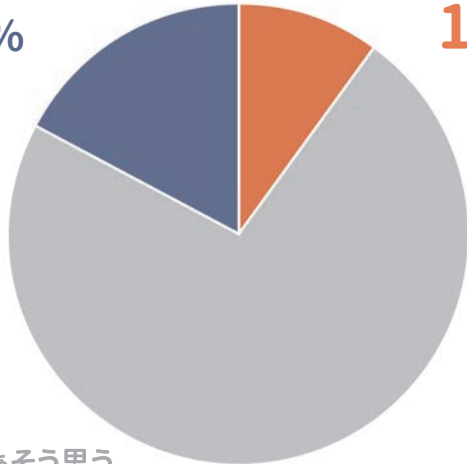
## # オンライン授業、ぶっちゃけどう？

#ミュートを外して自由に発言しづらい #場の雰囲気や周りの(学生たちの)様子が分かりづらい #グループ活動が活発化しにくい #話し合いに参加しない人の存在 #誰から話し出すかをうかがう無駄な時間の発生 #友達に相談しにくい #授業内外でのちょっとしたコミュニケーションの制限 #話し合いの間やテンポに対する違和感 #監視されているような感覚 #人間性が育たない #人間関係が育成されない #孤立化 #電子機器の操作の慣れ・不慣れで生じる差 #受講環境の整備に伴う負担 #家庭環境による格差 #修学意欲の低下 #緊張感のなさ⇒集中力の低下・学習の質の差 #自己管理が大変 #実習・実験は厳しい #目の疲れ、首のこり、腰の痛などの健康被害 #生活習慣の乱れ #課題の多さとそれに伴う負担の大きさ #通学に伴う運動の減少 #ノートをとらなくなった(書くことに意味があるはず) #公平なテストの実施が不可能に近い



**Q** 今後、学校教育はオンライン授業を積極的に取り入れていった方が良いと思いますか？

あまりそう思わない **17%**      とてもそう思う **10%**

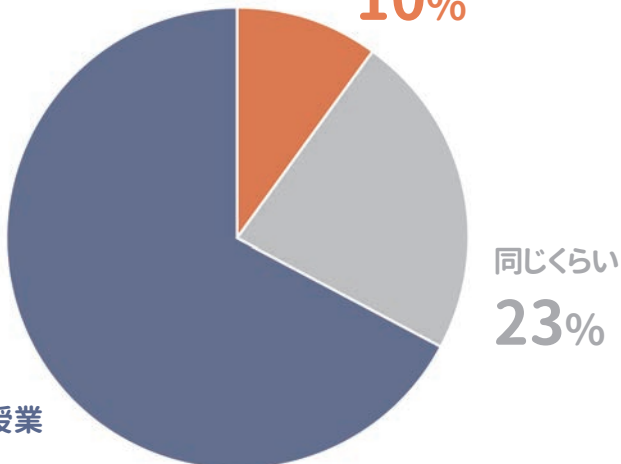


まあまあそう思う

**73%**

**Q** 「学びや成長の実感」という点において、オンライン授業と対面授業、どちらの方が自分はよく学んでいると思いますか？

オンライン授業 **10%**



対面授業

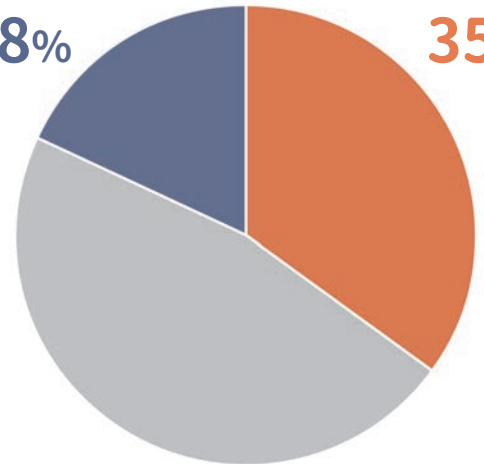
**67%**

同じくらい

**23%**

**Q** あなたはオンライン授業が好きですか？

いいえ **18%**      はい **35%**



どちらともいえない

**47%**

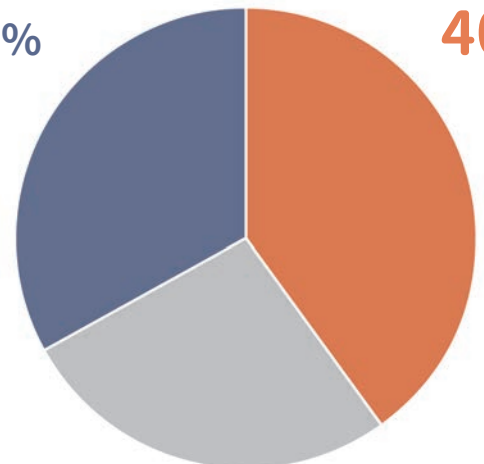
**Q** 「学習時間」という点において、オンライン授業と対面授業、どちらの方が自分はよく学んでいると思いますか？

対面授業

**33%**

オンライン授業

**40%**



同じくらい

**27%**

一緒に考えてみませんか？

# 新型コロナ DE 授業づくり！

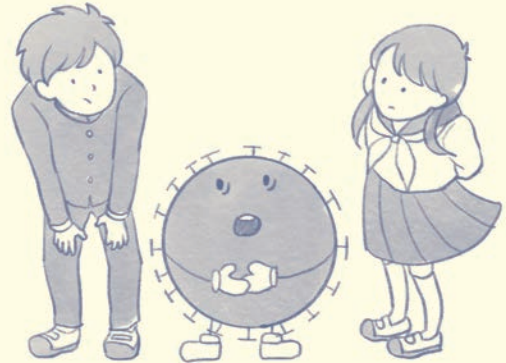
今後、きっと様々な教科書で「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）」のことが記載されることになるでしょう。その頃にはパンデミックもほぼ収束しているはずですが、その頃には“遠い記憶”になってしまっているかもしれないのです。「まだよく分からないことだらけなのに、今、授業で本格的に取り上げるのは……。ただでさえ、やらなければいけないことが多いのに……。」という声も聞こえてきます。

そんな時こそ見方を変えましょう。どこまで分かかってきて、どこからがまだ分からないのか、論理的思考の出番です。ここまでの経緯や経験、現状をどう捉えるのか、批判的思考の発揮のしどころです。これから私たちは何をすればいいのか、どう生きていくのか、創造的思考が問われるわけです。教師も子どももみんなと一緒に探究すればいいのです。誰もよく分からないのですから。「旬」を逃さず、ホットなトピックをもっと学校教育へ。例えば、こんなアイデア、いかがでしょう？

## 「こんにちは、私は新型コロナウイルス」

関連教科：理科・社会・国語・芸術など

人間から悪者扱いされ、嫌われる新型コロナウイルス。でも、立場が変われば、見え方も変わるはず。新型コロナウイルスになりきってみよう。どこから来て、どんな特徴があり、誰と仲間なのか。何が得意で、何が苦手なのか。そして、人間に何を語りかけるだろうか。



## 「キツイ自粛生活をネガポジターン！」

関連教科：家庭・保健体育・技術・国語など

とにかくストレスフルな自粛生活。ココロとカラダの調子がいまひとつ。みんなのお困りごとをリサーチして、ネガポジターンに挑戦しよう！ちょっと言葉や行動などを工夫するだけでも好転するかも。もしかしたら新商品の発明や開発にもつながるかも…。



## 「どうなってるの？ 新型コロナウイルス関連の“予測”」

関連教科：数学・情報など

テレビやネットでよく見聞きする今後の感染予測。そういえば経済への打撃なども試算されてる。でも、よくよく考えてみれば、どうやって計算してるんだろう？ そのからくりを暴いてみよう。

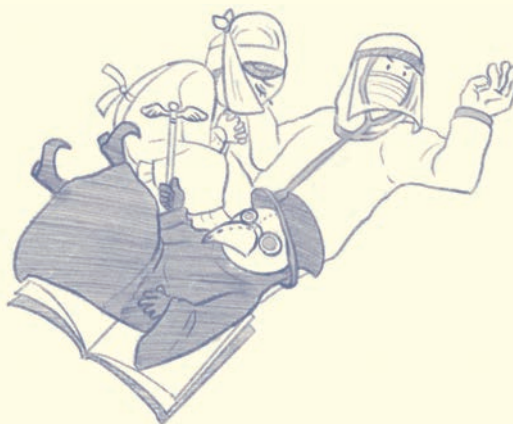
数字を鵜呑みにするのではなく、数字の意味を知ることが大事！



## 「今に始まったことではない！ 感染症と人間のレキシ」

関連教科：社会・国語など

思い返せば、ペストやコレラ、スペインかぜ、マラリア、結核など、多くの感染症に人間は苦しんできた。今でもそう。感染症を題材にして描かれた文学作品もたくさん。実は根絶できたのはポリオだけ。感染症は私たちの社会をいかに変えてきたのか、歴史から学ぼう。



## アイデアはまだまだたくさん！

みなさんなら教科横断的にどんなアプローチで迫りますか？

三人寄れば文殊の知恵。

さあ企画会議のスタートです！







昭和女子大学現代教育研究所  
Institute of Modern Education  
Showa Women's University

## 現代の教育課題の探究と本学園の存立理念の確認という

### 二つのテーマを柱とした研究所です。

現代教育研究所は、現代の教育課題の探究と本学園の存立理念の確認を目的とした研究所です。総合学園として学内のネットワークを構築するとともに、学外の研究者、教育関係者はもとより、様々な教育機関や研究機関と広く連携を図り、研究成果や提言の発信を行っていきます。学園内外でのネットワークを深め、時代の流れに敏感でありつつ、それに流されることなく教育について自由闊達に議論考察を行い発信する拠点としたいと考えます。

**WEBSITE** : <http://iome.jp/>    **MAIL** : [kyoikuken@swu.ac.jp](mailto:kyoikuken@swu.ac.jp)

昭和女子大学教職課程研究報

**EduMate**  
vol.5

■編集■

EduMate 編集部

■発行■

昭和女子大学現代教育研究所

■発行日■

2021年3月2日